

焼夷弾が足元に

秋葉 幸雄

(麻布の空襲)

私は麻布の広尾町八番地に、三十年位住んでいました。港区の空襲での飛行機の編隊規模は、だいたい東京大空襲と変わりません。確か、昭和二十年四月十三日か十五日の夜の空襲時でした。麻布十番が焼けたのを野次馬根性で行きました。麻布日活という結構有名な映画館が燃えているの自分の目で確かに見ました。

昭和二十年五月二十三日、私が住んでいた目の前の家に焼夷弾が落ちましたがたまたま不発でした。ちょうど私は道路にいて、足元に焼夷弾が散ってきたのです。本当に九死に一生を得ました。だから、運が良かったんですね。焼夷弾は、六角形の小さな筒ですけど、直撃されていればもちろん即死です。もうびっくりして、空襲警報が解除になるまでは、死んでしまうのかとその日はずうっと思っていました。空襲警報が解除になってやっと、「ああ、生き延びたな」と思いましたよ。また、私の家のはす向かいの二階建ての家に焼夷弾が落ちて、二階の部屋が燃え上がりました。それで父親と隣組

のみんなでバケツでリレーをして、父親が一階の屋根から水を掛け、消火活動をして消したんですよ。運良く焼け野原にならずに済みました。都電通りを挟んだ真向かいの商店、屋敷、お寺、住宅等が焼夷弾で戦災にあって焼けましたね。すぐそばの児童養護施設も戦災にあって、一部を残し焼けました。日赤の産院は無事でした。あと爆弾も落ちてきましたね、焼夷弾はひらひらと落ちてきて、ザーと異様な音がするんですけれど、爆弾はほんとバーンと迫力が違うんです。爆弾はものすごい音でしたよ。

(疎開先でも機銃掃射)

私は、筈(こうがい)小学校六年の一学期に、戦争が激しくなってきた、母親の田舎の千葉県山武市の成東(なるとう)に疎開しました。そこでも空襲にあいました。

昭和二十年の七月頃だったかなあ、空襲警報が鳴って、いやあ、すごかったね、今度は、グラマンとか戦闘機ですよ。田舎の家の前が県道で、そこを目がけてダダダッって機銃掃射で発砲してくるんです。すごかったですね、低空飛行だから。そのパイロットの顔まではつきり見えました。恐ろしいのなんの、本当に恐ろしかったよ。

もう戦争はこりこりです。二度と起こしてはなりません。

忘れたくとも、忘れられない記憶

行田 重男

(五月二十四日の空襲の記録)

私が空襲に遭ったのは、東京の新宿牛込山吹町という所です。山吹小学校を卒業して、四月に中学に入学、五月に空襲です。私の家族は弟が三人、兄と姉と妹の両親合わせて九人家族でした。弟達は学童疎開で栃木に行っていました。当時は、警戒警報になったら電気は消すか黒い布を被せ、空襲になったら全部消します。被いは各家庭で工夫して、外側が黒い布、中は赤い色、カメラの撮影の時に被せる布と似ていました。電灯のすぐ下で、勉強したりしましたね。

戦争中は、枕もとに着るものを用意していました。それを着て防空頭巾を被って逃げるのです。その日は叩き起こされて、まず家の前の防空壕掘に入りました。ところがB29自体が燃えて落ちてくるし、焼夷弾も落ちて来たのもうここには駄目だと思って親と一緒に逃げました。妹をおぶった母は、忘れ物を取りに行くから、「お前たち先に逃げろ」って言うので、私と姉と一緒に逃げました。鶴巻町の公園に深い大きい川がありまして、人の後について行ったのです。誰か

が「爆弾が落ちるー」と叫ぶと、爆弾の爆風を避けるために親指を耳に当てて、人差し指と中指で目を覆って、地面にさっと伏せました。ところが、いつまでたっても音がしません。そうしている内に、背中を後ろからけ飛ばされたのです。「何やっているんだ、早く逃げろ!」というので、起きあがると周りは燃えて火の海です。姉をゆすり起こし、火の粉をよけるため防火用水の水を洋服にかけて、江戸川橋の方へ逃げたのです。江戸川橋を渡ると右側にガソリンスタンドがあったと思いますけど、人が火達磨になっているんですよ。右の方では電線が切れて、そこに立っているような感じで死んでいる人もいました。

それから、高台のお寺の中に行きました。お墓がありましたね。お墓の手洗い水を手ですくって二人で飲みました。舌が、がさがさしているのですけど、のどが渴き、懸命に飲みました。下を見ると私の家の方が一面火の海でした。それと物すごい熱風で、屋根のブリキの大きいのが真っ赤になって飛び散っていました。火の粉と共に熱風が渦巻いています。もう死ぬ思いでしたよ。それで、一番先に思ったのは両親ですよね、二歳上の姉と二人だけですから、姉は泣くし……。

火で明るかった夜も、だんだん太陽が上がってきて明るくなってきました。まだ熱気がすごかったのですが寺の高台からおりて行くと、多くの人が亡くなっていました。死体をま

たぎながら橋を渡って、小さな神社の鳥居を曲がり、家の周
辺へ戻るとただ水道管だけがあつて他には何もありませんで
した。水道から、水がぼたぼたと垂れているだけです。向こ
う隣の方がいて、「助かったのかー」って言うから「助かった
ー」ってねえ。もう涙を流してねえ。だけど「お父さんお母
さんどうした？」と言うから「分からない」って答えました。
そうしたら、兄は一人で別に逃げて助かり戻って来ました。
母と父親は見当たりません。心配になり江戸川橋の川淵に亡
くなった方を並べてあると聞きまして、探しに行きました。
黒焦げの人もいるし、川へ飛び込んで溺死した人もいるし、
それから、防空壕の中で窒息死した人もいるのでなかなかわ
かりません。どんどん遺体を並べているのですが、両親はい
ないようでした。そこへ両親がやってきました、もちろん妹
も母の背中にいましてみんなが再開できたのです。父親と母
親は、逃げ遅れたのが幸いして、いつもの防空壕ではなく、
他の防空壕に入つて助かったそうです。父も一生懸命に、入
り口の方で土を掘ってかけて消火をしたと言っていました。
父は目が熱風で焼けただれて、ほとんど見えなくなっていま
したね。江戸川橋小学校で夜を迎え、その日の夜中に貰った
おにぎりの美味さで、あの味だけは、未だに忘れられません。

(悲惨さは言葉では)

その空襲で、小学校の同級生はほとんど亡くなって、生き
残った人はいないですね。同窓会をやっても、私たちのクラ
スは、ほとんど集まりません。友達の悲惨な死を思い出すの
で、私もなかなか行けませんでした。今でもあの道路に遺体
があつたということが脳裏に刻み込まれていますよねえ。忘
れられないです。いかに悲惨かということです。ほんとに今
思つても、地獄絵ですね。空襲は、兵隊さんと戦っているの
じゃなくて、民間人相手ですよ。アメリカ人は、あの当時、
鬼畜米英と言いまして鬼みたいなものだと思ひましたよね。
でも、同じ人間ですし、戦争という二文字が、悲惨な状態を
生んだのであつてね、憎しみを思うのはいけないと思うよう
に私も最近変わってきました。でも亡くなった人の気持ちを
思つたら、断腸の思いつていうかね、身体がちぎれるような
思いです。川沿いにずうっと並んでいる死体を、自分の親じ
やないか、子供じゃないかと思つて探して歩く姿は、正気な
気持ちじゃないでしょうね。悲惨ですよ。たまに何かの時に、
あの時の悲惨さを、ハツと思ひ出しますよね。そうすると本
当に腹が煮えたぎるっていうか、もう本当にちぎれるような
思いを感じますよ。

東京での戦争・戦後体験

匿名希望

(世田谷で強制疎開)

私は、今は港区に住んでおりますが、東京の世田谷で生まれました。開戦の時は、女学校を卒業して、そんな時代になったものですから、家のお手伝いさんがお暇を取ったのと、年寄りのお世話をしなければいけなかったものですから、家において家の手伝いをしておりました。もちろん、あの時代は、学校を出て仕事をしていませんと、女性でも勤労働員で、外に出なければいけません、私は、長女ということもあって、そんな事情から家の仕事をするようになったんです。

それから、住んでいた家が強制疎開にあいまして、引越しをしました。強制疎開というのは、延焼防止と、逃げ道確保の理由などで、強制的に建物が取り壊されることなんです。私の家は、小学校の側で、小学校への影響を考えてのことだと思いますが、何しろ目ざわりな物は、全部強制疎開にあつたんです。取り壊す必要もないような建物も壊されてしまいました。もったいないですね。

(中野での被災、そして終戦)

引越した家も、中野で、終戦の前の日に焼夷弾で被災しました。終戦がもう一日早かったらと思いますね。延焼でしたけど、もうあと一日だったんですよ。中野だったので大丈夫だろうと思って、家の中の物は、何も持ち出さずにいたものですから、本当に、丸焼けで何にも無くなりました。考えれば、強制疎開の時から苦勞が始まっていたと思います。とにかく性格が真面目なものですから、戦争中・戦後を通じて食糧には苦勞しました。なんとか配給で、間に合わせようとしていましたので、ギリギリまで闇の商品や買出しには行かなかったですね。あの頃は、買出しに行つて、買ってきた商品を闇で売る人たちもいましたけど、私には出来ませんでした。

空襲が激しくなつて、いよいよ生活も厳しくなつて、ようやくお芋を買出しに行つて、背負つて帰ってくるくらいのものでしたね。禁止されていたお米なんかは、とんでもない話でした。当時は、厳しかったですからね、よく生きていたと思います。

玉音放送(終戦を告知する天皇陛下のお言葉)は、焼け出されて、お世話になつていた家で聞きました。そうして、志願して海軍に行つていた一番上の弟が、まだ日本の国内で訓練中だったためすぐに帰つて来ました。戦争が終わつて、良

かったと思いました。

この頃、戦争を体験した人が少なくなり、世の中が戦前のような物騒な様相です。平和を守るために出来ることはしたいと思います。



毎日新聞



毎日新聞

第二部 (インタビュー・空襲)

白金の空襲の記憶

各務 和子

(家族の戦争史・兄弟)

私は、港区の白金猿町で育ちました。港区と品川区の境目が私の家でした。裏に、頌栄女学校があります。第一国道の通りから、家の前まで防火壁がありました。あの一角に、五世帯から六世帯の方がお住まいでした。私は五人兄弟で、白金小学校に通っていました。空襲が激しくなり、お隣が子どもを連れて引越すので、一緒にと誘われて、八歳・六歳の弟・妹二人が静岡県掛川の縁故疎開しました。でも二人だけではかわいそうで、母が四月二十九日に迎えに行き帰って来た後、五月二十四日に空襲です。焼けても死んでも一緒にいようと、疎開をやめていました。当時、兄は幼年学校から航空士官学校に行っていました。戦争が長引けば、もう少しで死ぬところでした。飛行訓練のため満州に渡る途中、舞鶴で船が攻撃されて学生は山の中に逃げていてやがて帰って来たのです。

(家族の戦争史・父)

三月十日の東京下町の大空襲は、我が家があった高台からも見えました。空は真っ赤に燃えていましたから。私の父は、墨田区本所の銀行に勤めており、翌日の朝早くから出て行きまして、夜遅く帰って来た際、死体の間を歩いて帰って来たと言っておりました。そして、五反田から上がって来る時に、泥棒に追いかけられたと言って、靴を持って玄関から入って来ました。真っ青な父の顔を、今でも憶えております。

(家族の戦争史・母)

私は長女でしたから、母と一緒にリュックサックを背負って、埼玉の方に食糧の買出しに行きました。六人の家族が食べなければいけませんから、相当な量の荷物を背負ってきました。お金だけではだめで、着る物を持って行って、お芋やカボチャと交換しました。お米は、本当に貴重品でした。母が庭でチャボや鶏を飼っており、時々食べさせてくれました。そういう母の知恵で、生き延びたのかもしれない。

(戦時下に校名変更)

私は、戦時中名前を変えられた普連土(フレンド)学園と言う女学校に通っておりました。理事長は、政府に随分反対致しましたが、普連土学園では、戦時中も英語教育をしばらく

続けておりました。フレンドは英語なので使えなくなりまして、聖友女学校となりました。私が三年生の時、勤労働員されました。学校工場でした。講堂や食堂を通信機器の作業場にして、ハンダ付けをしていました。始めは、週に一回金曜日に教室へ戻って勉強ができました。そのうち、兵隊さんが学校に駐屯することになり、勉強は出来なくなりました。毎日、私達は会社からの工場長のもとで、先生方に見守られて各部で働きました。五月の空襲で学校は焼け、芝浦工業大学の焼け跡で授業を、卒業式は高輪教会を借りて行いました。私の卒業免状は、普連土学園ではなく、聖友女学校となっております。

(空襲・ご近所でバケツリレー)

十四才の子どもでしたが、あの日の空襲は、五月二十四日の夜中から、二十五日の朝にかけてでした。あれは何時でしたのでしょうか。ふとんに入ってすぐ空襲が始まって、頌栄女学校の庭に逃げました。私の親が、家の方角が燃えているのを見ておりましたら、「まだ今なら大丈夫だ」と、ご近所の品川区の方が飛んで来てくれて、呼び戻されたのです。家に井戸がありましたので、その井戸から水をくんで消火活動にあたりました。私は長女でしたから、先頭に立ちまして弟が後について、ご近所の人はずうっと通りに並び、二十人くらい

でバケツの水をリレーして消火をしました。真っ暗な中で、火は激しく燃えておりました。もうすごい火でした。いつの間にか私は先頭で水を振り上げていました。井戸の水があったから助かって、品川区と港区側のあの一角は残りました。被災された近所の人たち、六家族くらいが、焼け残った私の家に引越してきました。それで一家族が一部屋ごとにとまって皆で住みました。その翌日、五月二十四日の空襲で焼けた学校に行きました。魚藍坂から普連土学園の裏口を通して学校に入りました。今までと違い何か空が明るいなと思いました。あるはずの校舎はそこにはありませんでした。聖坂を炎が走って、激しく燃えた跡を見ました。学校は全部焼けて、兵隊さんは誰もいませんでした。大きな水槽に食料の袋が投げ入れられていました。すべてが燃えてしまったのをみつけて、心の中にポカッと穴があいたようでした。だんだん落ち着くに從って、これも危ないと言うことで皆さんもいなくなりしました。

（戦争が私の一生を変えた）

空襲が私の一生を変えたと思います。

私たち家族は、大田区久が原の疎開家族の留守宅に移るようになりました。池上本門寺への道に大きな地主の百姓家があったからです。引越しの荷物を用意し全部出し終えた翌日に、



これは私は小学生頃です。時期がずれますが……



上級生の活動。

終戦の玉音放送がありました。その放送は、裏庭の井戸端で聞きました。子ども心に、何か聞きにくい言葉でしたけれど、後で母に説明してもらって分かりました。戦争が終わった時の、昼間のぎらぎらした太陽は救いでした。暑いとか、苦しいとかではなくて、「ああ空が見えた」って感じでした。この年は私にはすごいシヨックだった一年となりました。この経験が、その後の私の生き方（方向）を決め、平和への追求、社会のすべての人がしあわせに生きる生活の仕事へと私を導いたと思います。

中学生時代の戦争体験

神山 三郎

(立会川での空襲)

僕は、品川区大井町、京浜急行の立会川の側に住んでいました。昭和十九年の暮れ頃から空襲が始まり、三月の下町の空襲、五月の山の手の大空襲、そして城南の大空襲があり、ひどい時には連日空襲警報が発令されました。ラジオに警報が入りサイレンが鳴ると、家の庭の一坪ほどの小さな防空壕に避難しました。その防空壕は低地なので浅くしか掘れず、木材を並べて屋根代わりにした上を土で厚く覆ったものでした。腰をかがめて出入りし、中も立つことができず、はじめた地面に敷物を敷いて体を横たえるようにして、空襲警報解除を待ちました。危険を感じたときには、防空壕から出て、もっと安全なところを探して逃げました。空を見上げると、B29の大編隊から焼夷弾がザーッ、ザーッと雨のように降っていて、頭の上を斜めに落ちていきます。ものすごいですよ。すぐ上に見えたので近いのかなと思ったら、彼方の空が真っ赤になっていました。近くに高射砲の陣地がありました。まいったく命中しませんでした。

(麻布中学での戦争体験)

その頃麻布中学校(昭和十八年入学)に通っていました。京浜急行で品川まで行き、品川から三番、四谷塩町(今の四谷三丁目)行きの都電にガタゴト揺られて通学しました。最寄りの停留所は赤十字病院下でしたが、戦時下の鍛練ということで品川方面からの通学者は四の橋で下車するように定められました。遅刻しそうだとか、駆け足で坂を登るのは大変つらいものでした。中学二年三学期の時、天現寺の近くの安立(アンリツ)電気に学徒の勤労動員で行きました。我々はソケットの担当、その他旋盤係などが色々な職場で働いていました。安立電気が空襲で燃えたので、次に強制疎開で家を倒す仕事をしました。係りの人が柱にのこぎりを入れ、私たちが太い綱を綱引きみたいに引くと家がバアアアと潰れてね。大田区(当時は蒲田区)の蒲田の方まで行った経験があります。中学三年の夏休み頃からだったと思うけど、麻布十番側の丘に地下陣地を構築する仕事に動員されました。極秘のもので海軍の兵隊が壕を掘る仕事をやり、私たちの仕事は飯田町の貨物駅から、スコップで砂利をトラックに積んで現場まで運ぶ作業でした。一日三往復しました。暑い炎天の中で、手に豆ができてね。砂利はね、スコップにずっしりです。フラフラになっちゃうんです。積み上げた砂利の上で疲れて、寝そべっている時、米軍の艦載機に狙われて、命

のちぢむ思いもしました。

芝中学と正則中学は、戦災に遭いまして燃えたので、二校は麻布中学に間借りしていました。入学してからしつかりと授業を受けたのは二年生の二学期までで、三学期から三年生一学期までは授業をほとんど受けられませんでした。

(戦争で一番悲しかったこと)

戦争で哀しかったことは、私の一番上の兄が戦死したことです。海軍で横須賀から輸送船で、硫黄島までの物資の往復に携わっていました。昭和十九年、十二月二十五日、今で言えばクリスマスの日ですね。その日に戦死したという公報が来て、遺骨が届けられました。中を開けると、骨壺と言っても手で押せば崩れ落ちるような粗末なもので、中には英霊という印刷物が一枚入っていただけでした。一番、哀しかった思い出ですね。

(終戦の日)

八月十五日の前の日あたりから、「明日は南山国民学校の校庭に集まれ」といわれ集められました。その日は、兵隊が前方に、我々は後ろの方でした。放送を聴いたけれども、声が割れているし後方は聞きとれなかったですね。前方の方から、嗚咽の音が聞こえてきました。後で聞いた話では、指揮官だ

った人が自決をしようとして止められたという話を聞いています。あの時代は、必死というか、正義のためだと思ひ込まれていましたからね。

(平和への思い)

戦争が終わって、僕の家近くに、海軍の衣服を作る衣料廠というのがありました。その近くに捕虜収容所がありましたが、八月十五日の終戦の時には、捕虜達がアメリカの飛行機に手を振ったり、飛行機が、空から物資を落とすのを見ましたよ。皆、歓喜していました。終戦を実感したのはとにかく電気を明るくつけられるようになったことと、夜ぐっすり眠れようになった時です。戦争は、二度と起こしては、いいませんね。

家にスミを塗って目立たなく

北岡 修

(親戚の特攻隊員が上空から別れ)

私は、和歌山県の出身で、姉と兄の三人兄弟の末っ子でした。終戦の時は六才で幼かったものですから、戦争のことはあまり記憶にありません。家は農家だったので、食糧には困らなかったですね。里芋やジャガイモなどを作っていました。空襲はなかったですが、大阪を爆撃するB29が家の上を飛んで行きました。そのために、迷彩色として家の壁を炭で黒く塗って、家が目立たないようにしていましたね。

家から大分離れた畑で働いている人をめがけて、アメリカの飛行機グラマンが、機銃掃射をしたこともありました。その後、大阪空襲で焼け出された人たちが、疎開しにきました。また、親戚の人で兵隊に行く人がいて、父に挨拶にきました。その姿を遠いところから見えていましたが、軍服を着ていて軍服が怖かったことを憶えています。姉に聞いた話ですが、親戚の人がこれから出撃する時に、地元の上空を飛行機が三回ぐらい回って行ったということを聞きました。恐らく特攻隊で、地元の人達も知っていたようです。

昭和二十年、アメリカ軍が紀伊半島に上陸するという想定があり、それを迎え撃つために大阪から兵隊さんの一行が、山の中を行軍して来ました。細い坂道いっぱい、行軍は一週間続きました。道路脇の杉の木は、馬が通るので皮が剥けていましたね。終戦直前の話です。

(戦後、占領政策で電気が)

終戦の時、田舎では電気もなかったので、玉音放送は知りませんでした。情報もありませんでしたし、小さかったので戦争が終わったということも、理解出来ませんでした。ただ、父が毎朝竹槍を持って、町に訓練に行かなくなったことだけは覚えています。田舎の暮らしは、電気もなくて決して豊かではありませんでしたが、毎日の生活はちゃんと出来ていましたよ。学校に行くようになってからは、日常生活品や甘い物が少なかったことを記憶しています。電気がついたのは、昭和二十四、五年でした。後で聞くと、アメリカの占領政策で、電気のない所に電気を引っ張ってきたらしいですけど、アメリカの力を見せつけられましたね。

戦時中の夫婦の記憶

喜多埜 定雄・良子

(夫の戦争体験)

私は戦時中、愛知県の豊川市の海軍工廠に動員で行きました。軍隊に入るのが、一般の人より遅かったようです。近所の同級生は、昭和十九年に入営し、中国大陸に行き戦死しました。そして、私は昭和二十年二月初め、東部八十三部隊に入って、初年兵教育を受けている最中の三月、下町が空襲にあいました。その後、長野に大本営ができるというので、通信隊の暗号兵として行きました。その間、東京では、強制疎開にあって家が取り壊され、ご近所の壊されていない家に避難をしている時、港区の空襲にあったようです。八月、広島に原爆が落とされた翌日、豊川市の海軍工廠も爆撃されました。そこで一緒に働いていた工場の人も、ずいぶんと亡くなったようです。私は東京でも、豊川市でも空襲の被害にあうことはありませんでした。

(復員後の生活)

終戦後、八月末に復員して港区に戻りました。芝公園の防

空壕を掘り起こして、持ってきた材木で、バラックを建てました。焼け跡が沢山ありましたので、南京豆や何やら母が農作物を作っていましたね。配給も一日の量としては少ないものでした。買い出しにもよく行きました。列車は戦時中に爆撃されて数が少なく、買い出しに行くために、切符を一晚中並んで買いました。乗った列車は無がい貨車(屋根のない列車)でした。折角買った闇米を、検査で没収されたりもしましたね。食糧難で、お米はすぐになくなりましたので、一週間、毎日さつま芋ばかり食べていた時期もありましたよ。お陰で、お腹の調子は良かったです。

今も、東麻布に住んでいます。古い家は、空襲で全部焼けてしまいました。つらかったことばかり、覚えているものですね。

(妻の戦争体験)

私は当時、茨城県の水戸で生活していました。三月十日の日は、陸軍病院の看護婦養成所にいまして、空襲での負傷兵を二人がかりで担架で運びました。必至で運んだことを覚えていますが、当時は、正規の看護婦養成所だけでは間に合いませんでした。臨時で陸軍が看護婦を養成していました。全てが、戦争に向けての生活でしたね。しょっちゅう空襲警報が鳴って、着のみ着のままの服装でした。当時はとにかく、ゆ

つくり寝てみたいと思っていました。

(平和へのメッセージ)

何と言っても、戦争の悲惨さは繰り返してもらいたくないですね。



毎日新聞

第二部 (インタビュー・空襲)

木場で東京大空襲

小島 美佐子

(木場で生まれて)

生まれは江東区の木場で、父が材木屋でした。で、関東大震災で麹町に行きまして、小学校四年生までは、麹町小学校へ通って、五年生からまた木場の方へ戻って来ました。女学校は、今の深川高校を昭和十四年に卒業しました。卒業してから、家族も多いですから、お勤めしないで、家事手伝いはずっと家にいました。そして、昭和十六年に太平洋戦争が始まり、父が町会の方の仕事をしていたので、女子挺身隊として町会の事務員になりました。その頃から、だんだん戦争も激しくなってきた、空襲もありました。

家族は父、母、祖母と妹二人の暮らしでした。代々東京で、田舎がないものですから、食料の調達が大変でした。物は無くなってくるし。学童疎開は気の毒でした。最初の学童疎開の時は、都電の門前仲町で、皆が送りました。でもその後、東京は空襲で焼け、両親もいなくなつて、それっきりになつた人もいました。

(忘れられない東京大空襲)

昭和二十年三月十日の東京大空襲で、焼け出されました。掘ると水が出るから、庭の防空壕の周りを、五十センチ土を盛って固めておいたのですが、入り口の扉が木なんです。空襲のたびに、その防空壕に入りました。空襲警報が鳴ると、母がその頃四十六才で、父が五十一才で、祖母が七十二才でしたから、母が祖母の手を引いて、防空壕に入っておりました。三月十日までは、空襲警報がなると防空壕に入り、解除になると外に出て、無事に済んでいたのです。

その日、入り口の木の扉に、焼夷弾で火がついて燃えだし、中にいると、蒸し焼きになるので外に出ました。外に出ると、吹雪みたいに火の粉が落ちてきて、地上に居られませんでした。防空頭巾を被って、水の中に入りました。すごい風でした。父は、バケツを持っていましたが、飛ばされてしまいました。空襲は夜の十時頃から、夜通しやって、夜明けに終わり、敵機がいなくなつて、上がつてみたら回りはみんな焼け野原で、近所に居た叔母と母と祖母は、凍死していました。三月十日の水といえは、摂氏五度くらいですから。その水の中に五時間ぐらい入っていましたから。私達もやつと上がつて。叔母は流されてしまつて、後で地上に上げました。まわりに何にもないんですよ、もう体中が濡れているので、風が吹いて寒くて大変でした。

「お前、ちょっと警察に行つて見て来い」と言われたので、私一人で行きましたけど、警察も焼けていて、しょうがないので、母と祖母はそのままにして、それから小学校に行きました。小学校へ行つても、飲み水がなかったので、歩いて日本橋に行き、日本橋から地下鉄で、麴町まで行きました。麴町には伯父が、お医者さんをしていました。赤坂見附から弁慶橋に出ると、おまわりさんに呼び止められました。「どうしたのですか?」って。何しろ薄汚れて、凄いい格好でしたから。麴町はその時焼けなかつたので、父と妹と四人で、お世話になりました。みんな肺炎に罹り、一ヶ月くらい寝ていました。

その後、麴町にずっと世話になるわけにはいかないので、杉並の永福町に応接間を一間借りて間借りしたのです。その時の引越し荷物が、家財道具がみんな焼けちゃつて、リヤカー一台ぐらいのものでした。水から地上に出たら、防空壕の中の荷物のことなんて考えていられませんでした。命がけでしたから。木場は、軍需工場も何も無かつたですから、空襲を受けるなんて考えてもいなかつたです。それが三月十日は、無差別爆撃でした。それまでは、警戒警報が鳴つて、防空壕に入って終わると出てきて「今日も何も無くてよかつたね」と言っていましたから。それまでは、小さい範囲で空襲があるだけでしたから、荷物のことなんて考えませんでした。

(終戦後の暮らし)

杉並に越した後は、田舎が無いので、食糧難でお米が足りなくて大変でした。父も、娘三人を抱えて、大変だったんですよ。その後、杉並に小さな家を建てて、親子四人で暮らしていました。その頃の杉並には、八年間いましたけど、ガスも、水道も無かった時代です。父は、木場に行って薪を運んできたり、それが無いときは、石油のコンロを、どこからか買ってきたりしてくれました。停電も多かったので、石油ランプも、どこからか調達してきたりしていました。

終戦直後は、物が無くて本当に大変でした。食べるものも無く、当時はヤミの物があつたけど、買うにしてもお金が無ければ買えませんでした。終戦直後から考えると、よくこれだけ復興したと思います。今の人は、配給ということはわからないでしょうけど、進駐軍の配給にお砂糖が来ることもありました。バターはカロリーで換算して配給されていました。小麦粉は、パン屋に粉を持って行って、パンを作ってもらいました。昭和二十二年の暮れ、もち米の配給が遅れ、餅が買えず、餅の無い正月を過ごしたことを憶えています。父にしてみれば、お餅の無い正月は考えられなかったと思います。今は、一年中お餅も売っています。戦争で苦しめられた私にとって、この平和が永遠に続くことを心より願っております。



毎日新聞

新潟から戦時下の新橋へお嫁に来て

小杉 キク

(新橋で空襲)

昭和十九年十一月三日に、昔の町名芝区芝浦二丁目から新橋に二十才で嫁に来ました。夫は、父親の姉の子供ですから七つ違いの従兄にあたります。兵隊で満州へ行つて、胸部疾患になつて戻つて来て清瀬の陸軍病院に入りよくなつてから結婚したのです。結婚したその日から警戒警報が始まりました。結婚式の最中にお客さんがみんな帰つてしまい、私たちも玄関の脇に防空壕があつたのでもぐつてね、えらいところに来ちゃつたと思ひも毎日立っていました。でも、空襲といつてもその頃は、警戒警報が鳴つて敵機がきても、爆弾はまだ落ちて来なかつたのです。警報が鳴るや電灯に黒い布をかぶせ暗い中口もきかずじつと解除を早く早くと待つ、それが毎晩でした。いよいよ空襲警報、不気味なサイレン。体中がふるえました。夢中で荷物を運び出し、空襲が解除になるとまた持つて帰る日々でした。こんな物までなんで持つて来たのかとあまりにも荷物が多さに大八車をかりてひっぱる夫に文句を言われながらすこすこと帰りました。

四月十日の空襲では四丁目まで燃えました。しかしうちは助かつたんです。空襲で空き地や空家が増えたので、そこへ皆で防空壕を掘りました。そして五月二十四日の空襲ではそこへ逃げたのですが、品川の方からずうっと焼けてきて、火に追われ桜田小学校まで逃げました。あのあたりは質屋さんが沢山あり、蔵は燃えませんが、途中みんな蔵の陰に逃げて来ました。あるおばあちゃんが行李(こうり)を持つて来ていたのですが、番をしていた人が火がつくと危ないから行李は駄目だといって取り上げて道に放り出しました。そこに火がついて見る見る燃えたのです。もう気の毒でしたよ。私共も家も道具もすっかり丸裸になつちゃつてね。

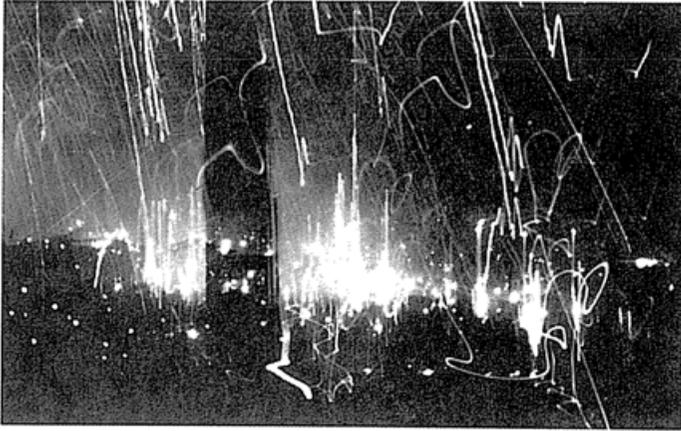
(戦時下の物不足)

物が無いことには苦労しました。食べる物がなくて、さつまい芋のつるを取つて油炒めにしたり、フスマ(小麦の皮、製粉後のカス)を食べたりしました。ちょうど私の従姉の夫が春日部で大工の棟梁をやっていましたので、頼みこんで寄せ集め木で掘つ立て小屋を建てて貰いました。また、夫は旋盤工でしたので、病気が治つてからは三菱重工へ行く生活でした。

(若い方へのメッセージ)

今の若い方は少し物を粗末にしすぎですね。私は、この年

になっても未だに物を大事にしますし、食べ物も丁寧の一つ一つちゃんと残さず食べます。新潟では雪の時に食べるために、雪のない時に土の下に埋めたり、乾燥させたりしています。私はそういうのを見てきているので、物を大事にしないと、必ず不自由が来るよって言っているんです。



毎日新聞

第二部 (インタビュー・空襲)

戦時下の新婚生活

近藤 なを

(空襲の話)

始めは一年間の約束で東京に奉公にきたんです。ちょうど、姉がいましたもので、一人で奉公に来たんじゃかわいそうだと、目黒区の姉の家に同居させていただいたんです。それから三年間奉公して、戦争が激しくなつてからは、徴用で武蔵小山の軍需工場で働きました。昭和二十年三月の東京大空襲は、覚えています。まだ外に防空壕が作れていなくて、大抵家の中に避難所を作っていました。姉の夫は徴集されて不在、姉の子供たちの上の子は疎開、下の子と姉と私が家にいました。

すごい空襲だったんですよ。あんまりにすごいので私を外に飛び出すと、姉が「危ないからだめ」と怒鳴ったんですけど、その頃は勇気があったんですかね(笑)。「外に出ないと判らないでしょう」って、外に出ました。空が真っ赤になつていて、くすぶつたような感じで、煙も来ていましたし、

花火のような音がしていました。

そのうち皆は疎開して、私一人残って軍需工場へ通いました。二十二才の時、縁があつて結婚しました。夫は三年間の兵役を終え、会社で重要な仕事をしていましたので、その後兵役を免れ、不動前の会社に通っていました。昭和二十年の空襲が激しくなつてきた頃です。新居は、仲人さんのお家の側で、雅叙園の下のあたりでした。新婚といつても、夫は空襲警報が鳴るとすつ飛んで行かなければならない状態でしたから、私のことなどをかまっている暇などありませんでした。ですから、空襲になると仲人さんたちと逃げました。

焼夷弾がキラキラ光りたくさん落ちてきました。振り返ると、お不動さんは高い所にあるので真つ赤に燃えているのがよく見えました。もうどっちに逃げていいのか、仲人さんの奥さんとみんな女ばかりで、火の中を防空頭巾の上から防火用水の水をかぶり、かぶり逃げましたよ。武蔵小山の方向へ逃げようとしたら、隣組の人にそっちに行つたら危ないよつて言われました。あれは、空襲が一番激しかった五月二十四日でしたね。空襲がおさまつて帰つてくると、焼け跡には焼夷弾が、山のようにでした。私が働いて、巢鴨まで行つて買つてきた家財道具も、焼けてしまつていました。もちろん家もです。借家でしたが、涙が出ました。夫のことが心配でし

たが、まず夫と同じ会社の仲人さんがお帰りになつて、大丈夫だよつて言われて、一安心、そして昼の一時に夫が帰つて来ました。そしてその後、仲人さんに田舎に帰つていた方が良いと言われて、交通手段がありませんから皆で上野まで歩くことになつたんです。そうしたら田町のあたりでトラックが、「何処までいくんだ」つて、「上野までだ」つて言つたら、「大変だから乗つてけ」つて言つてくれて御徒町まで乗せてくれました。上野の駅で、震災証明書を見せて無料で汽車に乗つて田舎に行きました。あの当時は、証明書を見せると、汽車は無料でした。

一週間田舎に行つて帰つて来ると、夫がバラック（仮に建てた家）を建てて、待つていてくれました。そのバラックで戦後もしばらく住みました。周りが全部焼けてしまったので、天気の良い日は富士山がくつきりと見えてきれいでしたね。それと、空襲で忘れられないのは、どこでしたか、お風呂か買ひ物の帰りに、大きな道路で、艦載機に追いかけられたことです。艦載機二機が、ダァッて追いかけて来たんです。ピツクリしました。今でも忘れられません。

玉音放送は、近所の寮母さんが、防空壕に仕舞つておいたラジオで聞きました。仲人さんが「戦争が終わつたんだよ」と教えてくれましたが、私は、複雑な気持ちでした。

(戦時下の暮らし)

暮らしについては、とにかく物がなかったですね。配給のチケットがあっても物が無いから手に入らない。それから、配給と言っても、たとえば「ふすま」と言っても、小麦を脱穀した後の糟みたいなもので、薄茶色と白のパラパラとした粉みたいなものが配給されて、小麦粉と混ぜて焼いて食べましたけど、まずかったですね。それと芽をとったさつまいもあれはなんだったんでしょうね? とにかく、美味しく食べられるものは、あまり配給されなかったですね。

私たちは夫の姉が茨城にいましたので、夫がたまに茨城に行って食糧を分けて貰ってきましたから、まあ恵まれていたほうなのかもしれません。それと、思い出すのは風呂ですね。ドラム缶の底に木のスノコをおいた五右衛門風呂でした。焼野原で囲いをつくり、すきまだらけで、見られてもあまり気にしないで済みましたが、それでも外ですからね少しは気になりました。

終戦を向かえ、バラック生活の中で長男を産みました。戦争が終わっても、物がありませんでした。たとえば、一番困ったのは、繕い物の糸がなかったことですかね。それでセメント袋を拾ってきて、袋を閉じる白いひもをほぐして、本当に細くして使いました。普通の木綿糸よりも太いわけでは

れどね。それを使って、繕い物をしました。まあしばらくは、そんな生活でした。



漆畑 廣作 画



漆畑 廣作 画

空襲・原爆の惨禍

斎藤 史

(東京・名古屋・大阪空襲を追いかけて)

昭和二十年の四月に、海軍兵学校(広島県江田島に本部のある海軍将校養成教育機関)に無事合格致しました。私は父を早くに亡くしたものですから、昭和二十年三月、当時在住の大阪から山形にある父の墓参りをしました。その後、東京の親戚に寄ってから大阪に帰ろうと三月十二日になんとか東京に着いたのです。ところが、東京の街全体がくすぶり続けまさに焼野原なんです。三月十日の東京大空襲で炎上して、臭いだけは強烈でしたが何も無くなっていました。上野駅あたりで降りてとこと日本橋越前堀の親戚の家を探しましたが、跡形も無く全部燃えてしまっていてあたり全体が焼け跡でした。親戚を捜すのにも捜しようが無いわけで、しようがないから大阪の実家へ帰ろうと思い、当時、確か新橋だったかな、夜行のぎゅうぎゅう積みめの貨車に詰め込まれました。三月十三日かな、名古屋が空襲に遭った直後で、町のあちこちが目の前で燃えているんですよ。大府駅あたりで降ろされてそれ

でも何とか歩いてでも帰ろうと西へ西へと行くと名古屋駅周辺が燃えているわけです。途方にくれていたら、関西本線の方の列車だったら動くらしいという情報で、これも貨車みたいなやつに乗り込みました。やっと大阪に着いたのが三月十五日ですよ。東京大空襲の後の焼け野原を見て、名古屋空襲を見て、着いたその夜が大阪空襲でした(笑)。だから一種の絨毯爆撃に遭遇したわけで、東京、名古屋、大阪、私はその爆撃の後を追いかけていたわけです。私が十五才の時でした。昔の旧制中学生です。

(被爆後の広島で人魂を見た)

海軍兵学校は軍隊の学校ですから、入学するにも優先的に大阪から列車に乗せてもらい、まず九州佐世保軍港近くの「針尾」に行きました。昭和二十年八月十五日の終戦は海軍兵学校防府分校で迎えました。終戦後八月二十日前後にそれぞれが帰郷ということ、夜行のおんぼろ列車に乗せられて、大阪に向かう途中のことでした。夜、原爆被爆地の広島を通るとき、いわゆる人魂(動物の死体から、リンが燃えて発すると言われる青い炎)が燃えていました。広島原爆で、大勢の人が亡くなった後、放置されたままで、リンが発して燃えているわけです。私は、生まれて始めて見たのでショックを受けました。

私の戦争体験は、空襲の惨禍と、原爆の人魂と、海軍兵学校での強烈なはずかずの体験であります。



漆畑 廣作 画



漆畑 廣作 画

第二部 (インタビュー・空襲)

焼死体が人形の大きさに

斎藤 恭子

(卒業式に空襲)

第二人は疎開させておりましたので、両親と私と三人で、日赤から歩いて直ぐの高樹町、今で申しますと南青山六丁目に住んでいました。父は五十才くらいでしたから、戦争には行っておりません。女学校の時の動員は、三菱重工の戦車等を造る所で事務の仕事でございました。先生方が適当に割り振って下さるんです。通勤途中ですぐ空襲になりました、電車が全部止まっていますよね、それで「こっちへ行くと渋谷へ行きますか」って皆に聞き聞きしながら、敵機が来そうだとあわてて防空壕に入りながら、だいたい渋谷へ戻るまでに空襲は解除になっちゃうんですけどね(笑)。怖い思いもしました。そうやって帰って来ましたら、実家から五十メートルくらい先の歯医者さんが、ぽっくり大穴が開いて無くなっていました。爆弾が落ちたのです。

卒業式の日、卒業証書を教室へ持って帰って、分けようと思ったら空襲警報が鳴りましてね。ですからみんなで、出席簿順に並んでいるのを受け取り、「生きていたらまた会いまし

「ようね」って言って分かれたのが最後です。学生時代のお友達も、結構亡くなりました。卒業後は何しろ「一つの家に主婦は一人」しかないと言う時代ですから家でぶらぶらしているのと、どこかともない所に動員されるのではないかと、両親が不安だったのでしょう。母の知り合いの海軍大佐のコネで、永田町の海軍施設本部という所に勤めさせていただきました。

(死体がお人形さんくらいに)

十八才の三月に学校を卒業して、五月に空襲にありました。全部焼けました。絨毯攻撃っていうか、波状攻撃っていうか、次々と来ましたけれど、五月二十四日から二十五日の未明にかけての一晩のことです。何といたのですか、火の粉といつか、焼夷弾のすだれみたいな爆撃でしたね。家から(今の南青山六丁目)全部向こうの原宿までずうっと焼けて見えませんでした。赤坂見附の方も何も無い、渋谷の方も何も無い。全部焼けました。

私たちははつきり言うのと、逃げ遅れたんです。まだ大丈夫だろうなんて思っていましたけど、火の粉(こ)が入ってきた、家の中の畳と襖がもうもうと燃え出したんですね。ですから父がもうこれはだめだから逃げようと言って、表へ出たら人っ子一人いませんでしたね。父は歩いて十二、三分の明

治神宮の表参道に行つて、代々木の練兵場に逃げようと計画していましたが、表参道はもう火の海でどうにもならなくて今度は霞町、今の西麻布を目指しました。でも、あっちの方もだめで狭い道入つて、青南小学校へ行こうと、車が一台やつとすれ違えるくらいの道を入りました。そんな狭い所に入りたくないって言ったのですけど、どこにも行く所がないものですから。でもその道も行かれませんでした。それで、その突き当たりの青山墓地の続きの小さな墓地に行きました。そこに行つて、谷になつている所の土手の途中に、持つていったスコップで穴を掘りましてね、それで三畳くらいの絨毯(逃げる時に水にぬらし、木製の台車にのせて持つて行つたものです)を敷いて、母と父と私、三人で穴に入りました。

そうしたら、穴の右前の崖下の家が焼けだしたんです。顔が熱くて、恐くて、それでタオルを水筒の水で濡らして顔の前に下げるんですけど、五分と経たないうちにカリカリに乾いてくるんですよ。そのうちに、背中の絨毯も乾きだしました。だんだん焼けてきて、私達が避難していた真ん前の家の家が焼けたら、我々ももうだめだなって父が言っていたんです。そうしたら、その家に男性が三人ほどいらして、火はたき“って、ご存知ないですよね(笑)。ねじった布を棒の先につけてそれを水で濡らして火を叩くんですよ。それを持って来て、大きな火の粉がパツといくと、みんな水をかかけた

り、「火はたき」で叩いたりして、とうとうその家は残ったんです。それで我々も残ったというか、助かったのです。

夜が白々明けてきて、父がもう大丈夫そうだから帰ろうかって言つて、小学校の傍まで行つたら、一メートルくらいのお人形さんが、学校の門の前に落ちていゝるんですよ。なんでこんな所にお人形さんがいるのだろうと思つて、母に「何でお人形さんがいるの」つて言つたら、「見ちゃだめ！」つて、母が私の顔を袂で陰に隠すんですよ。後で聞いたら、背中に刺青がある男の方の焼死体ですつて。こんなに小さくなるんですね。やっぱりお魚だつて焼くと小さくなる原理ですかね。デパートに飾つてあるキューピーさんのお人形さんの様な感じでした。ちらつとしか見ませんでしたけど、「あれはあなたには見せたくなかつた」つて後から母が言つていました。

（明治神宮の表参道が死体の山）

明治神宮の表参道も死体の山でした。表参道は、私共が逃げる時に既に火の海でしたからね。ですから、もう少し早く逃げていたら、死体のお仲間に入れて頂いたかもしれない。父は、「もう少し早く逃げるべきだった、女、子どもを連れてゐるのに判断が甘かつた」つて、その時言いましたけど、甘くてよかつたかも知れないんです。あそこに早く行つていたら、前はつかえ、後ろは火の海でしたからね。明治神宮の

石灯笼の所は、死体の山でした。皆さんご自分の生活で精一杯でしたから、かわいそうにずつと長い間、死体を片付けてくださる方もいらつしやらなかつた。長い間ね。

五月に焼けて八月までは、父が建築関係の仕事をしてたものですから、仕事関係の方が大急ぎで材料を持って来て、四畳半のトタン小屋を建てて下さいました。それができるまで三、四日は防空壕の中におりました。

焼け野原で、瓦や焼け跡を片付けて土を掘りおこして、とりあえずお野菜を植えて食べましたけど、配給はめつたに來ないのです。配給は、歩いて四十分くらいかかる所まで取りに参りましたけど、戦争だつたから皆さんそんなものだと思つて、あまり不平も言わずに何とか過ごしたんでしょかね。かえつてその時より、戦争あとのの方が食べるものが厳しかったのです。

ガタガタ震えていた空襲

斎藤 昭一

(リングゴ箱に乗って)

戦時中、世田谷区上馬におりました。親父は警察官で戦争には行きませんでした。

三月の空襲の時は、寒いのもありますけど、ガタガタ震えて歯が噛み合わなかった記憶があります。まだ六才の小さな子供でしたけれど、憶えていることは、空襲が終わった後に、小平市にいた叔父さんが自転車で心配して来てくれたことで、そうして、自転車の荷台のリングゴ箱に乗って、小平市まで行きました。世田谷区上馬は周りが焼けまして、今の環七沿いのうちの周辺は、運良く残りました。

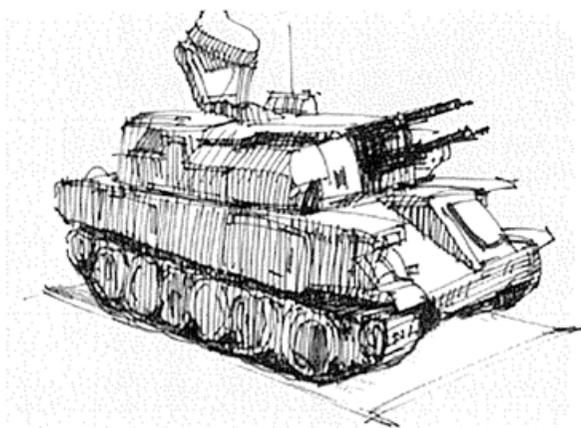
あと記憶に残っているのは、姉が勤労働員で行っていた工場に連れて行ってくれて、何か機械が動いていたのとお菓子ももらったような記憶もあります。親戚は運良く、一人も戦争の犠牲者がいませんでした。

その後、家族で小平に疎開しました。

終戦の放送は、全くわかりませんでしたけど、おばあさんと母が泣いていた様な気がします。戦後の食糧不足も、小平

の親戚が農家で苦労しませんでした。小平のあたりはほとんど畑ばかりでしたね。

まだ小さかったので、幼稚園時代のノートの絵は、日の丸の付いた飛行機だとか、戦車だとかを描いていましたね。



空襲の思い出

榊原 静江

町に救護班を作りSさん、Hさんと私の三人が任命され慈恵大学病院で教育を受けました。皆必死でした。人間の解剖を生まれて初めて見ました。恐かったですが頑張らねばと必死で勉強しました。若い男の人と年寄りの男の人と二体です。他に愛宕警察で豚や犬の解剖も見ました。動物が大好きなのでつらい思いました。空襲のサイレンで皆防空壕に入ります。防空壕の中で年配の人が南無阿弥陀仏とか、南無妙法蓮華經とかのお経をあげているその方がなんか怖かったですね(笑)。上からB 29が焼夷弾を落とすにきました。うちの母は空襲になると、近所のお年寄りと飛行館(現在の航空会館)に避難していました。私と父は火消し棒を持って、棒の先に縄が何本もついたのを防火用水でびっしょりぬらして持って家の前で真っ赤な空を見上げ救護班の用具を肩から下げ、いざという時に備えて居りました。しばらくしてパーっとそこいらが明るくなって家の屋根に落ちたのが見えたので、大急ぎで三階に土足のままかけ上がると家の三階の大きな五葉の松の植

木鉢に刺さって雨戸の板がボウボウ燃えていました。油脂焼夷爆弾です。「榊原です。三階に焼夷弾落下、助けてください」って三階から大声で叫びました。近所の男の人が五人ほど来てくれて、三階の防火用水と一階のお風呂に水がいっぱい張ってあったのを、リレー、無事に消して下さいました。朝になつたら家中ドロドロで、大変でしたが、燃えなくて本当によかったと思いました。知らない方達が助けて下さった事を今更乍ら感謝でいっぱいです。父がそれこそ大切にしていた五葉の松も助けてくれたと思います。毎年ピンクのかわいい松ぼっくりがとても可愛らしかったのです。

その夜、近所でお通夜がありました。おばあさんが亡くなったとの事です。私共の家の裏で空襲でその家も燃えたのです。朝になって見ますと遺体がまだ燃えてないものですか、家族がその辺から燃えた木を拾ってきて遺体を燃やしていたのが寂しかったですね。家が燃えたのに遺体だけが残ったのです。本当に怖ろしいというよりも、何か切ない思いでした。新橋駅方面を見ると、はるか一面の焼け野原でした。新橋駅がまる見えです。

戦争中、内幸町にNHKがありその隣に三井物産があつて、そこが官制本部と云っていました。その屋上に高射砲が何台かおいてあつて、B 29が来るとそこから高射砲を撃つのが恐

ろしかったですね。B 29が上に来たと思うと、空に向かって、ババババと高射砲を空に向けて撃つんです。高射砲の破片が、地面にぶつかってチャリンチャリンって音を立てるのです。それがいつぶつかるとも知れないのに怖いとも思いませんでした。B 29は下から見ると大きいですけど、日本の特攻隊の飛行機は米粒みたいでした。それが、B 29に体当たりするのが下から見えるんです。それが命中して、二機が火の玉になって落ちてくるのです。皆、泣きながら手をたたきました。よくやったという思いと、それで亡くなるのですからお国のためには言いながら、心中察して余りあります。ああ申し訳ないと、泣きながら手をたたいていました。戦争程残酷はありません。

(終戦、その後の空襲)

西新橋は残りました。戦争中、姉の夫は出征中で世田谷の姉のうちへ疎開しましたが、そこも爆弾が落ちて全部燃えてしまいました。それから、食糧難で、姉の子どもが四人もいたので一緒に千葉の大原に疎開いたしました。そこで、天皇陛下の終戦の放送を聞きました。皆正座して、平伏して玉音を聞いていました。初めて聞く天皇陛下のお声って、なんてすばらしいのだろうと思いました。皆平伏して涙して聞いて

いました。終戦の日はみんなみな泣きました。

終戦になってからも千葉で機銃掃射をされたんです。お米を分けてもらいに、親類の農家に行った時、田んぼの道を私と同じ年の従妹と農家の伯母さんが歩いていたら、小型の飛行機が低空で来て私たちに向かって機銃掃射をしてきて脅かされました。飛行帽をかぶって、メガネをして、はつきり顔が見えました。皆腰を抜かして、田んぼの中に尻餅をついて(笑)。腰がドロドロでした。三人で手で頭を隠して。上からパイロットは若い娘が逃げまどうのを見て笑っているのですが、ひどいものです。面白半分と思いました。用があるって一人で千葉から東京に戻る途中平塚で、終戦なのに空襲警報が鳴って「車掌さんが汽車から降りてかくれてください」って言うので降りました。隠れろ、隠れろと言うので降り、大きな金庫が斜めになって捨てられているのが見えたので、あそこに行きましょうって、ほかの女の人と一緒に、口の開いた金庫に頭を隠してお尻だけだして隠れました(笑)。それもアメリカ兵の悪戯でしょうね。

やっぱりいやですね戦争は。何もかも失って。世田谷で全部燃えて着る物がなかったり、ガスが出なかったり、水が時間が出なかったりです。銭湯も腰迄しかお湯がないとの事で両親が近所の人に家のお風呂を提供しました。タンスや家具

をこわして薪にして持ってお風呂に入りに見えます。ですから、うちのお風呂はいつも大入り満員(笑)。電話も解放して使ってくださいって皆さんよくみえました。助け合うのはお互い様です。終戦の時、私は二十才でした。その後、昭和二十二年始めに結婚しまして、暮れにはもう子供がいました。

その子ども(長女)が十歳くらいの時、お母さんはお父さんと一緒になったから私が生まれてお母さんに会えたのね! よかったうれしいと言われ驚きました。私もすぐ、お母さんもよお母さんもあなたに会えてうれしい、お母さんの子に生まれてくれてありがとうと言いました。下は息子ですが皆優しく親思いです。私の親は本当によく子どもを命がけで可愛がってくれました。その親を見て私も子どもたちをよく愛しました。この思いは代々続いて行けば嬉しいと思います。

第二部 (インタビュー・空襲)

空襲の思い出、平和を希う

佐治 小枝子

(東京大空襲と友の思い出)

私は戦時中、東洋英和女学院に通っていました。戦災で家族を失うとか、そういうことは、私にはありませんでしたけれども、三月の東京大空襲でお友達を失いました。三月十日の空襲の翌朝、学校に行きますと、松野さんの席が空いていました。「松野さんのお宅は下谷で下駄屋さんをしていられるので、昨晩の空襲に遭われたのでなければよいが……」と先生がおっしゃいました。私共は、はっとしました。夜中東の方の空が真っ赤に燃えていました。どんなに怖かったことでしょう。松野さんの席はその日以来空いたままです。

五月の空襲では、洗足池(大田区)にお住まいだった武田さんが爆弾の直撃を受け亡くなりました。武田さんは、いつも私が一緒に一の橋まで帰ってきた仲良しでした。お父様の大切な品物を、取りに入られた直後に、爆弾の直撃だったそうです。その後、彼女のお母様が話してくださいました。私にはまだ昨日のようです。私共の学校も港区の麻布ですから、五月の空襲では、校長先生が用務員さんと、一晚中屋上

の焼夷弾を消されたと言うことでした。お陰で学校は残りませんでした。翌日、まだくすぶっている十番通りを自転車に乗って私は学校を確かめに行きました。この日に大勢のお友達が被災されていました。

(自宅も被災)

私の家も台町で被災しました。焼夷弾があちこちに落ちて、落ちたところから火が燃え出しますから、防空壕に入っていたのでは、どこに焼夷弾が落ちるかわかりません。怖いというよりも夢中でした。裏のお家に火が付き、二番目の兄は「消してくる!」と言って走って行きました。明け方に、兄は目を真っ赤にして戻ってきました。飛行機はキーンという音を立てて焼夷弾を落としていきます。落ちた! と見ると、池の水に浸した筈(ムシロ)を引きずって走って焼夷弾の上にはべつと被せるのです。よくあれほどの力が出たと思うほどに、水を吸った筈は重いのです。塀や屋根には皆でバケツリレーをして燃え移らないようにしました。家は少し残りませんでした。消防署(団)は手押しの放水車をもって来られました。が、もうタンクの中に水は一滴も残っていないのでした。夜が明けて空襲警報解除になってから、恐ろしいことに、また大きな火の玉が、上空からこちらへ向けてゆらゆら落ちてきました。せつかく助かったのに、今度おちてくるのは火の玉

でしたから、どうにもできないと思いました。皆で空を見上げるだけでした。B 29のエンジン部分かもしれない周りの人達が言いました。風の加減で、その火の玉は家のほうには来ませんでした。

(兄の学徒出陣)

私の一番上の兄が学徒で、京都大学の繰上げ卒業で学徒出陣しました。そのときのことを思うと、未だに身につまされます。出征の時、隣組の組長さんが、万歳を三唱して送ってくださいましたが、もうそれが辛くて、母も私も隠れて泣きたい気持ちでした。兄が派遣されたのは激戦地ではなく、守備隊のスマトラでしたので、帰ることができました。兄の乗った復員船はシンガポールで、一年間イギリス軍の荷揚げ作業のために留められていました。ようやく兄が品川に着くという電報が来た時、母は万歳といって倒れてしまいました。

(伝えたい思い)

終戦の時は、今まで張り詰めていた気持ちがかかへいってしまい、母と抱き合って「明日からもう、空襲はないわね」と。ただそう言っただけでした。

あの時、兄を送り出した母の気持ちは、今になると、ますます切実にわかります。弱い子を育て上げて、ようやく大き

くなつたと思つたところで、戦争に送り出さなければならぬのです。生き残つた私に言えることは、もう戦争だけは絶対にやつてはいけないということです。昔、三国同盟に引きずり込まれて行つた時の日本の歴史を決して忘れてはなりません。

戦争に引きずりこまれないように政治をしつかりやつてほしい。これは日本だけでなくこの国にも言いたいです。



毎日新聞

第二部 (インタビュー・空襲)

お米を炒つて非常食

佐藤 エミ子

(工場で軍刀)

私は、昭和四年の生まれで、目黒で戦前・戦後を過ごしました。女学校へ行つておりましたけど、戦争が激しくなつてから、女子挺身隊で、中島飛行機や日赤(日本赤十字社)関係に日帰りで動員されました。日赤関係では、白衣のお洗濯などでした。中島飛行機では、軍用機を作るお仕事で、男子も動員されておりました。学校や家から電車に乗つて通いました。軍人さんが白い鉢巻をして、工場の中で日本刀を振り上げていましたね。空襲が激しくなつて、母が弟と妹を連れて、茨城に疎開しました。でも私は疎開するのが悔しいから、頑張つて父と目黒に残つていたのです

(目黒の空襲)

目黒の空襲は、凄かったですよ。逃げるのが大変だった。雨の様に焼夷弾が落ちてくる。兄たちが二人とも兵隊に行つてましたから、父親は大変でしたよ。「お腹すいた時に」って、母親がお米を炒つて缶に入れて、皆に持たしてくれていまし

た。空襲になるとそれを持って、名前を書いた防空頭巾を被って逃げます。

空襲は、焼夷弾が落とされる前に、飛行機から油が撒かれて、焼夷弾を落とすから、町はもう火の海ですよ。焼夷弾は、雨の様に落ちて来ました。それで、靴だと燃えちゃうので、父が地下足袋を買っておいでくれました。「地下足袋を履いて逃げなさい」とって、父が言いまして、地下足袋を履いて、布団を濡らして被って何しろ必死で逃げました。夢中で逃げた後、一段落すると目黒駅まで、焼けて何にもなくて見通すことが出来ました。一面焼け野原です。

(空襲後の暮らし)

家の焼け跡に帰ってきました。父はいつまでも焼け跡にいられないから勤め先に行きますでしょう。私は学校に行きました。学校が避難場所でした。そうしたら親戚の人が心配して、学校に向かえに来てくれました。親戚の家は焼けませんでしたので、下目黒の親戚の家に世話になりました。あの頃皆が疎開しまして、空き家がいっぱいありました。父親と親戚のおばさんが見に行きまして、大家さんに話をして、小さな家に父と住むことが出来ました。

母が弟と妹を連れて疎開して私と父しかおりませんから、配給をいっぱいもらい食べる物は困らなかったです。それと、

思い出すのは、目黒に北里研究所がありまして、戦災で食糧の倉庫が焼けた時、お米が炒りご飯みたいになりました。それを、皆が貰いに行きなさいって言われて、バケツを持って貰いに行った記憶があります。

(終戦と、平和への思い)

終戦の知らせは、女子挺身隊で行っていました中島飛行機で聞きました。次の日からもう挺身隊に行かなくて済むと思うと何かホツとして、嬉しかったですね。そして学校に戻りました。敵国語で、英語の教科書は没収されておりましたけど、英語の授業も始まりました。二人の兄が終戦になって、中国と仙台から下目黒の家に戻って来ました。戦前、戦後は混乱期ですから、住んでいる土地が自分の物になった方がおりました。父は、焼け跡に住んでもしょうがないからと、小さな家に住みましたけど、今思うと、もつと大きな家に住んでおけばよかったです、父が言っていましたけどね。でも、戦争はよくないです。戦争は二度と繰り返したくないですね。